

# И.А.フェドソーヴァの葬礼泣き歌に現れる鳥の表象について

## 鳩と小夜啼鳥を中心に

### Metaphorical Images of Birds in the Funeral Lamentations of I.A.Fedosova

文学研究科英文学専攻博士後期課程在学

中 堀 正 洋

Masahiro Nakahori

#### 目次

- . はじめに
- . フェドソーヴァの生涯
- . フェドソーヴァの泣き歌採録に関して
- . フェドソーヴァの葬礼泣き歌に現れる様々な鳥
  - 1 . 鳩
  - 2 . 小夜啼鳥
- . おわりに
  
- . はじめに

ロシア口承文芸のジャンルの一つに泣き歌があるが、泣き歌はロシア人の生活と切り離すことの出来ない通過儀礼（誕生・成人・結婚・死などの際に執り行われる儀礼習俗）の一端を担っており、葬礼、婚礼、兵役送りといった人生における重要な節目にうたわれる儀礼歌である。泣き歌の起源を断定することは困難であるが、間接的ではあるものの中世文献が示すところによると、早くは十二世紀末の『イーゴリ遠征物語』《Слово о полку Игореве》に確認することができ、泣き歌が民衆の伝統として、古来より連綿とつたわれ続けていたことが窺える<sup>1)</sup>。また、葬礼泣き歌が葬礼のあらゆる場面でうたわれていたことは<sup>2)</sup>、泣き歌が葬送儀礼の必要不可欠な構成要素となっていたことを示唆している。

泣き歌は、泣き女が遺族の哀しみの解釈者となり、身寄りを亡くした者たちと心を同じくし、彼らのことを思い、彼らの心情を追体験し<sup>3)</sup>、その悲哀や切々たる哀惜の念をうたった哀泣であるが、儀礼的に“泣く”ことが当時の村の生活の一部であり、さらには村の全ての女性がごく自然な行為として“泣いて”いたというロシア北方<sup>ルースキイ・セーヴェル</sup>においてさえ、イリーナ・アンドレエヴナ・フェドソーヴァ Ирина

Андреевна Федосова (1831-1899)<sup>4)</sup>の“泣き”の技量は比類なきものであった。

このように悲哀や哀惜の念をうたった泣き歌では、様々な詩的手法が取られ、口承文芸作品の常套表現である比喩表現が用いられる。フェドソーヴァの葬礼泣き歌においても同様に、様々な比喩表現が多用され、例えば、故人が太陽や希望に比喩されうたわれるが、そのような比喩表現のなかでも、フェドソーヴァの泣き歌に特に頻繁にみられるのは、多種多様な「鳥」を用いた比喩である。これらの比喩表現の多くは、親族名称語彙の代用や呼びかけ表現と考えられるが、それら以外の比喩も存在している。

ロシア本国では、様々な観点から泣き歌の研究が行われているものの<sup>5)</sup>、我が国においては、泣き歌の研究が進んでいるとはいえない状況であり、翻訳は数点あるものの、葬礼泣き歌の専門的な研究は少なく、フェドソーヴァに焦点を当てた研究は坂内徳明氏の数点のみである<sup>6)</sup>。我が国におけるこのような泣き歌研究の現状を踏まえつつ、本稿では、初めにフェドソーヴァの生涯と彼女の泣き歌採録の状況を通観し、フェドソーヴァの葬礼泣き歌のテキスト自体に焦点を当て、十九世紀後半から二十世紀初頭までの同時代、ロシア北方という同地域に極力限定した口承文芸の記述資料などと比較考察しながら、そこに現れる鳥、なかでも鳩と小夜啼鳥の表象を探ることを目的とするものである。

## ． フェドソーヴァの生涯

1895年、ロシア社会に大きな衝撃が走った。それまで知られていなかった「泣き歌」の公演がペテルブルグで行われたのである。そのうたい手は、天才的泣き女と謳われたイリーナ・アンドレエヴナ・フェドソーヴァであった。後述することになるが、ペテルブルグでのこの公演は当時の社会にセンセーションを巻き起こすこととなる。また、フェドソーヴァと民俗学者エリピジフォル・ヴァシリエヴィチ・パールソフ Ельпидифор Васильевич Барсов (1836-1917) との出会いがなければ、泣き歌の採録とその研究は現在のように行われていなかったであろうし、フォークロアにおいて泣き歌というジャンルが確立することはなかったであろうことから、フェドソーヴァ抜きには、泣き歌について論じることはできないといっても過言ではない。本章では、フェドソーヴァの生涯をたどり、彼女が当時の社会に与えた影響が如何なるものかを検証していく。

イリーナ・アンドレエヴナ・フェドソーヴァは、オロネツ県ペトロザボーツク郡トルグーイ郷で、厳格な父アンドレイ・エフィーモヴィチ Андрей Ефимович と気丈夫な母エレナ・ペトローヴナ Елена Петровна のあいだに1831年に生まれたとされている。フェドソーヴァの生年が定かでないのは、当時の農村社会において、徴兵のために必然的にその生年を知らなければならなかった男性に対し、女性は自分が年齢別にどの世代（少女、娘、結婚適齢期の女性、若い主婦、中年女性、老婆）に属しているかを知っていれば十分であったという状況が影響しており、彼女自身も自分が何年に生まれたかということは分かっていなかったようである<sup>7)</sup>。いずれにせよ、四人兄弟の長女として生まれた彼女の

家族は二十二人で、ロシア北方では典型的な大家族であった。そして、当時の農民の子供たちが過ごしたように、彼女もまた典型的な幼少期を送っている。彼女の言葉によると、六歳の頃には、馬を放牧にやり、厩に追い立てたし、八歳の頃にはどの畝にどれくらいの種を蒔けばよいかを知っていた。また当時彼女は落馬をし、生涯足が不自由になったこと、文盲であったにも関わらず、記憶力が並外れていたことなどを語っている<sup>8)</sup>。そして既に十二、三歳頃から泣き歌をうたいはじめ、当時の農村では若い娘が“泣く”ことが一般的であったという状況の中でさえ、彼女の“泣き”の技量は突出しており、その名声は彼女の住む村だけにとどまらず、広く奥オネガ地方にも知れ渡っていた。時には、彼女の“泣き”が所望され、七十露里、あるいはそれ以上の遠く離れた場所にまで、“泣き”に出かけて行くこともあったという<sup>9)</sup>。

1850年、フェドソーヴァは十九歳の時に、同郷の六十歳の男やもめピョートル・トリフォノヴィチ・ノヴォジーロフ Петр Трифонович Новожилов と結婚し、十三年の結婚生活を送ったものの、1863年にこの夫と死別している。翌年の1864年には、年下で大工のヤコフ・イヴァーノヴィチ・フェドソフ Яков Иванович Федосов と二度目の結婚をしているが、その生活は夫の家族との同居により、大変苦しいものであった。そして1865年、この二年後にパールソフとの劇的な出会いが待ち受けているペトロザヴォーツクに夫と移り住むことになるのである。1865年ないし1866年に、フェドソーヴァはブイリーナを採録したことで知られるリュブニコフ П.Н.Рыбников と出会い、この時リュブニコフが彼女から数篇のブイリーナを採録したとされているが、そのテキストは刊行されていない。ペトロザヴォーツクでは、彼女は1884年までの約二十年間を過ごすこととなるが、ここでパールソフと出会い、その結果、三巻からなるパールソフの泣き歌集が世に出ることとなるのである。

1867年3月頃、パールソフはフェドソーヴァのもとを訪ね、二人の最初の出会いが実現する。この時パールソフは彼女から十四篇のテキスト（巡礼歌十篇、ブイリーナー一篇、歴史歌謡と物語詩三篇）を採録したが、これは「オネガ周辺の民衆の慣習より」（Из обычаев обонежского народа）という題を付され、すぐに『オロネツ県報』《Олонецкие губернские ведомости》に掲載されたということである<sup>10)</sup>。その後、パールソフによる本格的な泣き歌の採録が開始されることとなるのである。この採録は最初フェドソーヴァがパールソフのもとに向いて行われたが、のちにはパールソフが彼女のもとへ出かけ、彼女の部屋で行われた。その採録は、夫の大工仕事の騒音や家事といった多くの障害の中で行われ、採録に適した状況ではなかったものの、一年以上も続けられた<sup>11)</sup>。そして、1867年中に葬礼泣き歌と婚礼泣き歌を、翌1868年には兵役送りの泣き歌の採録が終わり、これらの歌の一部は「オロネツの泣き女」（Олонецкая плакальщица）という論文とともに、1870年に『現代報知』《Современные известия》誌に発表されたということである<sup>12)</sup>。

そして、1872年に『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』《Причитанья Северного края, собранные Е.В.Барсовым》第一巻が刊行された。この第一巻の刊行は、当時の社会に大きな反響を呼び起こし、すぐに社会学者ミハイロフスキイ Н.К.Михаиловский、民俗学者ヴェセロフスキイ А.Н.Веселовский や

ロシア文学史家マイコフЛ.Н.Майковらが書評を行い、作家のネクラソフН.А.Некрасовは『誰にロシアは住みよいか』《Кому на Руси жить хорошо》の百姓女の章で、メーリニコフ=ペチエルスキイ П.И.Мельников-Печерскийは『森の中で』《В лесах》において、その泣き歌を利用したのである。第二巻が世に出るのはそれから十年ものちの1882年のこととなるが、この間のフェドソーヴァの情報を伝える資料は少ない。二人の息子が亡くなり甥を養子にしたこと、84年には夫ヤコフが亡くなったこと、夫の死後ペトロザヴォーツクを離れ故郷に戻ったが、親戚との折り合いがあわず、隣人たちが援助をするほどの極貧生活を送っていたことなどである。この間に『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』第二巻（1882年）、第三巻（1885年）が刊行されている。

その後1880年代の後半には、フェドソーヴァはパールソフ以外の採録者と出会い、その際に採録されたいくつかのテキストが残されている。1886年には船上で民俗学者イストミンФ.М.Истоминと作曲家ジュトシГ.О.Дютшが婚礼歌を採録したが、これは1894年に『1886年にアルハンゲリスク県とオロネツ県で収集されたロシア民衆の歌謡』《Песни русского народа, собранные в губерниях Архангельской и Олонецкой в 1886 г》に収められた。またその年の秋に、彼女はアグレネヴァ=スラヴァンスカヤО.Х.Агренева-Славянскаяのコリツォヴォの領地に呼ばれ、スラヴァンスカヤによってブイリーナ、民衆宗教詩、葬礼泣き歌、抒情歌などが採録された。このスラヴァンスカヤによる採録は、三巻からなる『ロシア農民の婚礼の記述』《Описание русской крестьянской свадьбы》として1887年から89年にかけて刊行されることになる。コリツォヴォから故郷に帰ったフェドソーヴァは、やはり貧しい生活を強いられることになるが、1894年までの五年間もまた彼女の足跡を伝える情報はない。しかし、この後のフェドソーヴァに関する情報は、かなり詳しくその足跡を伝えている。

1894年7月には、ペトロザヴォーツクのギムナジウムで教師を務めていたパーヴェル・ヴィノグラードフП.Т.Виноградовがフェドソーヴァを訪ね、ペテルブルグでの泣き歌公演に彼女を招いている。そしてロシア地理学協会の招聘によりヴィノグラードフとともにフェドソーヴァはペテルブルグに赴き、1895年1月8日には第一回目の公演が行われ、その二日後の10日には科学アカデミーの集まりでうたい、賞状と銀メダルが彼女に贈られている。これらの公演では、作曲家リムスキイ=コルサコフ Н.А.Римский-Корсаковが彼女の泣きのメロディーを九つ書き取ったが、これは後にオペラ「サトコー」（Садко）の中で用いられている。この公演ののち、彼女は帝室アカデミーや考古学協会、ギムナジウムなどで泣き歌をうたっている。これらの公演では、上述のマイコフ、文献学者のソボレフスキイ、『生ける昔』《Живая Старина》誌の編集者ラマンスキイВ.И.Ламанский、歴史学者ベストウージェフ=リュージンК.Н.Бестужев-Рюмин、音楽家バラキレフМ.А.Балакирев、歌手のシャリヤーピンФ.И.Шаляпинらが彼女の肉声を耳にしている。また1月25日には民俗学者ルィバコフС.Г.Рыбаковも、いくつかのメロディーを採録している。

そして95年の12月には、彼女はヴィノグラードフとともにモスクワに出立している。モスクワでは12月24日、当時の学术界で偉大な役割を果たしていたブイリーナ研究の大家フセヴォロド・ミルレル

В.Ф.Миллерの家で泣き歌をうたっているが、ここではパールソフ、文芸学者グルジンスキイ А.Е.Грузинский、モスクワ大学付属自然科学・人類学・民俗学愛好者協会の総裁アヌチンД.Н.Анучин、作家ボポリキンП.Д.Боборыкин、音楽学者ブロークЮ.И.Блокらが彼女の泣き歌を聴いている。翌96年1月3日にも同協会の集まりで、彼女は泣き歌を披露しているが、ここでは彼女に対して銀メダルが贈られている。翌4日にはモスクワ考古学協会の集まりで公演し、明けて5日には音楽学者ブロークが彼女の肉声を蠟管に収めている。そして、6、7日と二回の公演を行いペテルブルグに戻った。4日後の11日にはモスクワ大学付属自然科学・人類学・民俗学愛好者協会から彼女に賞状が贈られている。

そして二ヶ月後の3月3日に彼女はペトロザヴォーツクに発ち、6日には一度故郷に帰るのであるが、この時、彼女は故郷に学校を建設するための資金として、95年の1月8、10日の二回の公演で得た三百ルーブリを寄付している。児童文学作家トリヴェロヴァА.Н.Толивероваの回想によると、この寄付は彼女が文盲であることを後悔していたからであるという<sup>13)</sup>。3月24日に故郷からペテルブルグに戻り、5月にはアメリカへの招待の話があったが、健康面の不安から彼女はこれを断っている。6月5日には全ロシア芸術産業博覧会に招待され、ヴィノグラードフとともにニージニイ・ノヴゴロドへ出立している。9日には公演を行っているが、この聴衆の中には若きゴリキイА.М.Горькийがあり、この時の模様を「博覧会にて」(На Выставке)、「泣き女」(Вопленица)という二つのルポルターージュで伝え、また小説『クリム・サムギンの生涯』《Жизнь Клина Самгина》やルポルターージュ「地の果てで」(На краю земли)で彼女のことにふれている。彼女はまた、11日にニージニイ・ノヴゴロドでの二度目の公演を行い、翌12日にはカザンにまで足を運んでいる。そして6月18日にニージニイ・ノヴゴロドに戻るまでに、数多くの公演を行った。ニージニイ・ノヴゴロドに戻ってからも、当時フェドソーヴァの「セアンス」という言葉が生まれるほど、彼女は学校などで精力的に公演を行い、6月23日に最後の公演を行ったのであるが、当時の新聞は7月末まで彼女の公演が続くと伝えていたということであり<sup>14)</sup>、フェドソーヴァが非常に注目されていたことが窺える。

6月末にペテルブルグに戻ってからは、約三年間、作家・民謡学者のフィリポフТ.И.Филипповの家にとどまることになるが、1896年6月末から99年までのペテルブルグでの彼女の情報は全くといっていいほどない。99年の春、フェドソーヴァは体調がすぐれず、故郷に帰ったが、7月10日に亡くなり、彼女の亡骸はクザランダのオネガ湖畔の墓地に埋葬された。こうしてフェドソーヴァは六十八年の生涯を閉じたのである。

このようにみえてくると、フェドソーヴァの生涯を大きくいくつかの時期に区切ることができる。第一に、1831年に生まれてから、二人目の夫ヤコフとペトロザヴォーツクに移り住む1865年までで、この時期は当時の農村社会が概して貧しかったように、フェドソーヴァも同様の境遇で育ち、泣き女としての素質が磨かれた時期といえるであろう。第二に、ペトロザヴォーツクに移り住んだ1865年から、ヤコフの死後故郷に帰る1884年までであるが、この時期には、パールソフとの出会いがあり、彼女の

人生にさほどの変化はなかったものの、『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』が刊行され、当時の社会に反響を呼んだ時期である。第三に、1895年ヴィノグラードフに連れられペテルブルグに行き、ペテルブルグ、モスクワ、ニージニ・ノヴゴロド、カザンで積極的に公演を行い、1896年6月末に最後の公演を行うまでの時期である。70、80年代には、それまでの民俗学研究においてと同様、何よりもまず彼女のテキストが世に問われたが、90年代には、フェドソーヴァの積極的な公演により、彼女個人の創作的側面が注目され、語り手と創作作品は切り離せないものとして浮き彫りにされていくのである<sup>15)</sup>。このことは、これまでの民俗学史において、語り手個人の情報が無視、あるいは軽視されていた流れに大きく影響していくことになる。そして、既に述べたとおり、この時期に多くの知識人が彼女の公演を耳にし、ネクラソフやメリニコフ＝ペチェルスキイがその作品中に泣き歌、あるいは泣き女を、リムスキイ＝コルサコフがそのメロディーを用いたこと、またゴーリキイのルポルターージュのように当時の模様を伝えた新聞や雑誌が数多くあることは、フェドソーヴァが、あるいは彼女の“泣き”が当時の社会に与えた影響力が計り知れないほど大きかったことを示しているといえるであろう。また、フェドソーヴァのこれらの公演がなければ、泣き歌がこれ程までに認知されることはなかったであろうし、フォークロアにおける現在の泣き歌というジャンルが確立することはなかったといえるであろう。

最後に付け加えておけば、フェドソーヴァ生誕百五十周年にあたる1981年には、その功績を称え、オネガ湖から見えるクザランダの小高い丘の上に、「偉大なる民衆詩人イリーナ・アンドレエヴナ・フェドソーヴァここに眠る」と刻まれた墓銘碑が建てられたということである<sup>16)</sup>。

## ． フェドソーヴァの泣き歌採録に関して

前章では、フェドソーヴァの生涯をたどり、当時の社会に与えた影響を検証したが、本章においては、彼女のテキスト採録において、誰がより忠実に彼女のテキストを採録し、どれがより信頼出来るものかということを検証していく。

泣き歌の採録が本格的に行われるのは十九世紀後半からであるが、フェドソーヴァの泣き歌が採録される直接的契機となったのは、既述のとおりフェドソーヴァと民俗学者パールソフとの出会いであった。パールソフによる採録は、1867年に二人が出会った直後から始められており、採録された泣き歌は、『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』として1872年に刊行され、当時の社会に大きな反響を呼び起こした。

しかし、フェドソーヴァの泣き歌を採録したのはパールソフだけではない。1880年代からフェドソーヴァはパールソフ以外の民俗学者などにも出会い、いくつかのテキストを残している。1886年には民俗学者イストミンと作曲家ジュトシガフェドソーヴァから採録した婚礼歌一曲を、『1886年にアルハンゲリスク県とオロネツ県で収集されたロシア民衆の歌謡』に収めている。また1886年の秋には、

アグレネヴァ＝スラヴァンスカヤがフィリーナ、民衆宗教詩、葬礼泣き歌、抒情歌、俚諺や諺風成句などを採録し、三巻からなる『ロシア農民の婚礼の記述』として刊行した。しかし、これは比較的まとまったものとしての価値はあるものの、ディレクタントである採録者の手が加わり、フェドソーヴァ自身による言葉を伝えていないという点で、残念ながら価値の高いものとはいえない<sup>17)</sup>。また1895年1月の時点で、ペトロザヴォーツクのギムナジウム教師ヴィノグラードフはフェドソーヴァから二八四二行を書き取っていたということであり、『オロネツ県報』が伝えるところによると、新しい全集が用意されていたという<sup>18)</sup>。彼が1894年7月に初めてフェドソーヴァと出会ってからの短期間に採録を行ったようであるが、採録されたものは刊行されていない。ヴィノグラードフから民謡学者フィリポフに採録されたものが預けられたという可能性もあるが、1899年にフィリポフが逝去したことによって、上記全集の刊行計画が頓挫しており、さらにその資料自体が紛失されているため明確なことは何も分からないのである<sup>19)</sup>。1895年には児童文学家トリヴェロヴァが昔話、婚礼泣き歌、子守唄、そして葬礼泣き歌の断片を採集しているが、残念なことに、児童向けの読み物として、その言語とリズムに訂正が加えられているということである<sup>20)</sup>。

また1895年にはリムスキイ＝コルサコフが彼女の“泣き”のメロディーを、民俗学者リュバコフも同様にいくつかのメロディーを採録している。リムスキイ＝コルサコフはフィリーナ、婚礼歌、葬礼泣き歌など九つを採録しており、これはフェドソーヴァが有していた伝統的なメロディーの手法に関する考えを伝えるものとして重要なものである<sup>21)</sup>。そして、1896年には音楽学者ユーレイ・ブロークが、エジソンから贈られた録音機によって葬礼泣き歌と民衆宗教詩を一曲ずつ、計二曲を蝋管に録音しているが、残念ながら解読できるのはそのうちの民衆宗教詩一曲のみということである<sup>22)</sup>。しかし、これは彼女の肉声を残したという点で非常に重要なものである。

このようにみると、泣き歌の採録は、パールソフ、イストミンとジユトシ、アグレネヴァ＝スラヴァンスカヤ、トリヴェロヴァが行ったもの四点、メロディー、あるいは肉声の採録は、リムスキイ＝コルサコフ、リュバコフ、ブロークが行ったもの三点である。このうち、泣き歌のテキスト研究において、採録者の手が極力加わっていないものはパールソフのものに限られてくるのである。またその分量は、ヴィノグラードフのものが二八四二行であったと伝えられているのに対し（ただし既に述べたとおり、これは刊行されていない）、パールソフのものは、第一巻だけで九四二五行という約三倍もの分量となっている。さらに、パールソフ収集のテキストは配列に若干の手を加えたものの、テキスト自体には何の変更も行われていない<sup>23)</sup>。

一般にフェドソーヴァの泣き歌研究においては、パールソフ収集のテキストが用いられるが、これは、フェドソーヴァの泣き歌を採録したもののうち、テキストの純粹性とその膨大な採録量という観点から『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』以上に優れたものはないという考えからなされている。このような理由により、本稿においてもテキストは『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』から用いることとする。

## ． フェドソーヴァの葬礼泣き歌に現れる様々な鳥

既に述べたとおり、一般に泣き歌では、口承文芸作品の常套表現である比喩表現が多用されるが、『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』に収められたフェドソーヴァの葬礼泣き歌にもやはり比喩表現が用いられている。一般に泣き歌においては、故人を表す語彙（*умерший*や*покойник*など）や親族名称語彙（*муж*、*сын*や*дочь*など）を用いることを忌避し、これらの語彙の代わりに様々な比喩表現（*надежная головушка*、*красное солнышко*、*боровая ягодиночка*など）を代用するが<sup>24)</sup>、フェドソーヴァの泣き歌においては、そのなかでも特に鳥を用いた比喩表現が多用されている。彼女の泣き歌に現れる鳥を列挙すると、白鳥、鳩、鷹、燕、大鴉、小夜啼鳥、鷲、郭公、鴨、家燕、鷲鳥、鴉、黒丸鴉、鶺鴒、雀、火の鳥と十六種類にも上っており、鳥以外の動物として現れる兎やオコジョが若干数でしか用いられていないのに対し、鳥を用いた比喩表現は回数にすると約二百回以上にも及んでいる。本章では、そのなかでも鳩と小夜啼鳥に焦点を当て、その表象を探るものとする。

### 1．鳩をめぐる表象

既に述べたとおり、フェドソーヴァの葬礼泣き歌では、多様な鳥が用いられるが、なかでも鳩は全体で二十七回登場する。その内訳は次に示すとおりで、*голубко*が十一回、*голубушка*が七回、*голубушко*が一回、*голубонько*が五回、*голубь*が二回、*голубок*が一回である。このうち、女性名詞の*голубко*、*голубушка*、*голубушко*、*голубонько*は女性の親族名称語彙の比喩として代用されている語彙である。語尾に*о*を取り、形の上では中性形をしているものもあるが、例えば*голубко моя белая*（*ПСк. Т.1. 168-112.*）<sup>25)</sup>、*голубушко сестрица*（*ПСк. Т.1. 123-111.*）、*голубонько сердешная*（*ПСк. Т.1. 123-97.*）などの表現が示しているように、女性の親族名称語彙の比喩（これらは文法上の性（*grammatical gender*）は中性であるが、自然性（*natural sex*）は女性）として扱われている。また、男性名詞の*голубь*は男性の親族名称語彙の比喩として代用されている語彙で、同様に*голубок*は“死”（*смертушка*）の比喩として用いられた語彙である。*смертушка*は女性形で、*смерть*の指小形であるが、*голубок*という男性形の語彙で代用されている。

同様に、フェドソーヴァの泣き歌には比喩されるものとその対象の性が一致しない箇所がいくつか見受けられる。

Впереди да шло бессчастье ясным соколом,  
Позади оно летело черным вороном!  
(*ПСк. Т.1. 29-52 ~ 53.*)

前には、“不幸”が凜々しき鷹となってやって来た  
後ろには、“不幸”が黒い大鴉となって飛んで来た

У окошечка ведь смерть да не давалась;

窓のそばで、“死”は許しを請わなかった



Потихошеньку она да подходила,  
И черным вороном в окошко залетела.  
( ПСк. Т.1. 26-41 ~ 43. )

静かに、“死”は忍び寄って来た  
黒い大鴉となって、窓から飛び込んで来た。

Зло-несносное велико это горюшко  
По Россиюшке летает ясным соколом,  
Над крестьянами, злодийно, черным вороном;  
( ПСк. Т.1. 239-18 ~ 20. )

やるせない“不幸”は、大いなるこの“悲しみ”は  
ロシアじゅうを凜々しき鷹となって飛び回る  
農夫たちを見下ろすように、“不幸”は、  
黒い大鴉となって飛び回る

上に引用したテキストの下線部では、中性名詞である“不幸”が男性名詞соколやворонに、また女性名詞の“死”が男性名詞воронに喩えられているが、やはり鳩の場合と同様にその性は一致していない。このように、フェドソーヴァの泣き歌では、擬人化された“死”や“不幸”が鳥に比喻される際に、性が一致しないという幾つかの例が確認できる。この点に関しては、フェドソーヴァが人間を比喻する場合と人間以外の何らかの存在を比喻する場合に、意図的に男性形と女性形の使い分けを行ったのではないかとの推測もできるのであるが、本稿では字数の関係により、性の不一致はあるものの смертушкаをголубокに比喻することだけが特別でないということを確認するにとどめる。

それでは、鳩と「死」あるいは「異界」を結びつけるような観念が存在していたのかを具体的に検討していきたい。聖書では、イエスが洗礼を受けた時、「天が開けて御霊が鳩のように降った」「天が裂けて聖霊が鳩のように降った」などとあり<sup>26)</sup>、諺風成句においては、「Голубь - божья птица.<sup>27)</sup> 鳩は、神の鳥。」というものがある。また、俗信においては、「鳩が棲み着いた家には幸せが訪れる」<sup>28)</sup>、「結婚が行われる家に鳩が飛んでくると幸せな結婚になる」<sup>29)</sup>といわれている。あるいは、鳩を殺して、その肉を食用にすることは禁忌とされていた<sup>30)</sup>。これらのことから、民衆のあいだでは、鳩は聖なる鳥、神の鳥、淨い鳥という観念が存在していたことが窺える。

さらに、『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』の序文において、オロネツ県では鳥が人間の魂と考えられていたことが伝えられている<sup>31)</sup>。また、二十世紀初頭、ロシア北方の民衆生活をつぶさに見た作家ミハイル・ブリーシヴィンの著書『驚かざる鳥たちの国』《В краю непуганых птиц》では、農民から聞き取った話がいくつも紹介されており、泣き女に関する一章が設けられているが、そのなかでアルハンゲリスク県やオロネツ県において、蝶（あるいは蛾）、兎、オコジョと並んで、鳩を見た女性が「Вот чья-то душка летает（ほら、誰かの<sup>ひとだま</sup>人魂が飛んでいる）」ということがあるという記述を見出せる<sup>32)</sup>。このような俗信は、人魂が鳩に姿を変えろという観念がロシア北方において存在していたことを物語っている。また、スモレンスク県では、魂は死者から灰青色の鳩となって飛び出すともいわれており<sup>33)</sup>、ロシア北方において人の魂が鳩に姿を変えろという観念が少なからず存在していたことを裏付けるものである。このように民間伝承では、鳩は幸せのシンボルであると同時に、死後の魂

は鳩となりあの世に飛んでいくと考えられていた。

ところが、フェドソーヴァの葬礼泣き歌では、擬人化された“死”が、鳩に喩えられるという、民衆の鳩に対する観念とは一見矛盾するような箇所が見出せる。例えば、「叔父を偲ぶ姪と夫を偲ぶやもめの哀歌」(Плач племянницы по дяде родном и вдовы по муже)のなかでは、次のようにたわれる。

Нонько крадци пришла скоряя <u>смеретушка</u> ,	今、素早い“死”が足音を忍ばせてやって来た
Пробралась в наше хоромное строеньеице,	こっそりと、私たちの家にやって来た
По пути она летела <u>черным вороном</u> ,	道すがら、“死”は黒い大鴉となって飛んで来た
Ко крылечку прилетала <u>малой пташечкой</u> ,	階段口に、小さな小鳥となって飛んで来た
Во окошечко влетела <u>сизым голубком</u> ,	窓から、灰青色の鳩となって飛び込んで来た

( ПСк. Т.1. 143-66 ~ 70. )

泣き歌では、上に引用したテキスト同様、「Она крадци с грудей душу вынимала; “死”がこっそり魂を抜き去っていった。( ПСк. Т.1. 176-91. )」という表現が示しているように、“死”は前触れもなく、静かに忍び寄り、愛するものの命を奪い、遺された者に深い悲しみとその後の不幸をもたらす存在として描かれている。では何故、泣き歌では、このような“死”が概して「聖なる鳥」という表象を有する鳩に喩えられるのであろうか。

ここで、鳩と「死」が結びつく泣き歌以外の資料を見ていきたい。非常に稀な観念であろうと考えられるが、“鳩が窓に飛び込んでくると死人が出る”という「神聖な鳩」のイメージとはそぐわないかのような俗信そのものが存在している。例えば、次のような諺風成句がある。

Голубь в окно влетит      быть пожару, или кому-нибудь умереть; иногда быть вестям.<sup>34)</sup>

鳩が窓から飛び込んでくれば、火事が起こるか、誰かが死ぬ前兆。時には何かの知らせ。

また、1925年生まれのウリヤノフスク出身の女性が語った、鳩の飛来が死人を出す前兆となった実話が採録されている。

《Это еще моя мама говорила: “Если птичка в окно влетит      это к упокойнику”. Любая птичка. Вот у меня одному брату умереть      голубь влетел, и моей маме умереть      тоже птичка в окно влетела. Она говорила всегда: “Если птичка влетит в окно — эт она приносит какую-то весть нехорошую”....》<sup>35)</sup>

「これは私の母がいったの。『もし小鳥が窓に飛んでくれば、それは死者が出る前ぶれ。』ってね。どんな鳥でもよ。私の兄弟が一人死んだんだけど、鳩が飛んできたからよ。母が死んだのも、同じように小鳥が窓に飛んできたからよ。母はいつもいったわ。『もし小鳥が窓に飛んできたなら、それは、

小鳥が何かよくない知らせをもたらしてることよ』ってね。」

俗信では、鳩に限らず、鳥が窓に飛んでくると、誰かが死ぬ、あるいは不吉なことが起こる予兆と考えられていたが（例えば、諺風成句に「Ласточка в окно влетит к покойнику.<sup>36)</sup> つばめが窓から飛び込んでくると、死人がでる前兆。」というものがある）上述の女性が語った話では、同じような俗信にまさに鳩が現れた、ある種特異なものと考えられるのである。そしてこの場合、鳩と「死」あるいは「あの世」との結びつきを明確に示すものとなっている。

また、『不幸物語』《Повесть о горе-злочиастии》においては、“死”ではないものの、擬人化された“不幸”がやはり鳩となって飛んで来る。

Я от горя во чисто поле,                    わたしは“不幸”から逃げる、清き野へ、  
И тут горе - сизым голубем!<sup>37)</sup>        だがそこには“不幸”が、灰青色の鳩となって飛んでくる

『不幸物語』に登場する“不幸”は、不幸をもたらす存在として、さらには鎌を手に入りの命を奪いにやって来る存在として描かれており、引用のとおり、ここでも鳩と「異界」との関わりを見ることができるのである。これらの観念は、“死”が鳩になって飛んでくるということを、間接的ではあるものの示しており、泣き歌に現れる鳩は、人魂がまさに鳩に姿を変えろというキリスト教に影響を受けたであろう鳩の神聖な形象と、“死”が鳩に姿を変えろという鳩の持つ不吉な形象の両側面を有しているといえる。つまり、民衆の鳩に対する観念の一部であるキリスト教的な観念と、一見それに相反するような異教的な観念とが、泣き歌のなかで混在しながら表現されていると考えられるのである。

## 2. 小夜啼鳥をめぐる表象

小夜啼鳥はフェドソーヴァの葬礼泣き歌のなかで九回用いられている。その内訳は、*соловеюшко* が三回、*соловьёшко* が二回、*соловьёшка* が一回、*соловеюшки* が一回、*соловей* が一回、*соловьина* が一回である。このうち、女性名詞 *соловьёшка* と *соловьина* は女性の親族名称語彙の比喩として代用されている。二回用いられる *соловьёшко* は情景描写としての実際の鳥と *как* を伴う比喩として実際の鳥を、*соловеюшки* は *как* を伴う比喩として実際の鳥を表している。そして、*соловеюшко* と *соловей* は「異界」との関連を想起させる、夢に現れる得体の知れない存在として描かれている。語尾に *о* を取る *соловеюшко* は、形の上では中性形をしているが、*Прилетал да этот мелкой соловеюшко* ( ПСк. Т.1. 42-44. ) *Соловеюшко садился под окошечко*, ( ПСк. Т.1. 42-46. ) *Обманул да меня малой соловеюшко* ( ПСк. Т.1. 43-95. ) という表現が示しているように、男性名詞の比喩(これらは文法上の性( grammatical gender ) は中性であるが、自然性( natural sex ) は男性)として扱われている。

小夜啼鳥が夢に現れる不思議な存在として描かれているのは「夫を偲ぶやもめの哀歌」（Плач вдовы по муже）の次のような箇所である。

Прилетали перелётны малы птиченьки,	小さな渡りの小鳥が飛んで来た
Малы птиченьки летели-то, незнамые,	小さな小鳥が飛んで来た、未知なる鳥が
Прилетал да этот мелкой <u>соловеюшко</u> ,	この小さな <u>小夜啼鳥</u> が
Друга птиченька — орел да говорючей!	他の小鳥が、言葉を話す鶯が飛んで来た
<u>Соловеюшко</u> садился под окошечко,	<u>小夜啼鳥</u> は窓の下へ腰をおろし
Как орел да эта птица на окошечко;	同じように鶯も、この鳥も窓に腰かけた
<u>Соловей</u> стал потихошеньку посвистывать,	<u>小夜啼鳥</u> はそっと啼き始めた
Как орел да жалобненько выговаривать.	同じように鶯も、悲しげに話し始めた
Оны тоненьким носочком колотили,	小鳥は細いくちばしでつつき
Человицьим оны гласом прогласили,	小鳥は人の言葉のように急に啼き叫んだ

（ ПСк. Т.1. 42-42 ~ 51. ）

このあと小夜啼鳥は、寝ているやもめを夢から起こし、立派な家が建てられ<sup>38)</sup>、夫がお前を待っているから、墓場の夫のもとに行け、と予言めいたことを伝える。ところが、それを信じてやもめが墓場に行くと、そこには一本の十字架と石ころがあるだけで、やもめは騙されたとさらに嘆く、というくだりである。

ここでは、小夜啼鳥は、夢に現れ、人間のように話し、予言めいたことを口にするが、後にそれが嘘だとわかり、非常に不思議な、かつ邪まな形象で描かれている。

それでは、小夜啼鳥に関する民衆の観念とは如何なるものであったのであろうか。諺風成句では、次のようにいわれているものがある。

Ласточка весну начинает, а соловей кончает.<sup>39)</sup>

燕は春を始め、小夜啼鳥は春を終わらせる。

Соловей начинает петь, когда напьется росы с березового листа.<sup>40)</sup>

白樺の葉から露が飲める時期になれば、小夜啼鳥は啼き始める<sup>41)</sup>。

また、森がまだ繁らなうちに小夜啼鳥が啼き始めれば不作の前兆といわれ<sup>42)</sup>、小夜啼鳥が啼かなくなると大麦の穂が実る時期などとも考えられていた<sup>43)</sup>。これらの観念は、小夜啼鳥が季節（夏の訪れ）を告げる鳥であるとともに、民衆のあいだで、この鳥が農耕と深く結びつけられていたことを示

唆している。

さらに、小夜啼鳥は、その体が小さいにも関わらず、力強く、素晴らしい啼き声を出すということでも有名で、次のようにいわれていた。

Мал соловей, да голос велик.<sup>44)</sup>

小夜啼鳥は体は小さいが、声は大きい。

小夜啼鳥の特徴的な啼き声から、その声は神から与えられたものとも考えられていた<sup>45)</sup>。そして、民衆が、古来よりその特徴的な声を特別なものと考えていたであろうと推測できる記述が『イーゴリ遠征物語』のなかに見出せる。

О Бояне, соловію старого времени!<sup>46)</sup>

おおボヤーンよ、古き昔の小夜啼鳥よ

これは贅辞の意を込めた形容として、グースリ（ロシア古来の豎琴）の名手であり、吟遊詩人であるボヤーンを小夜啼鳥に喩えた表現であると考えられる。また、соловейの古い語形と考えられるславии<sup>47)</sup>は、榮譽を表すславаが起源だとする民間語源説も存在している<sup>48)</sup>。これらのことから、小夜啼鳥の啼き声は、他の鳥の追隨を許さぬ特別なものと考えられていたことが分かる。

それでは、小夜啼鳥が、泣き歌に登場するような未来を予言し、あるいは不思議な存在として考えられるような観念はあったのであろうか。

ロシアのグリムと謳われるアレクサンドル・アフナーシエフが収集した『ロシア民話集』《Народные русские сказки А.Н. Афанасьева》では、飼っている小夜啼鳥が子供の未来を予言するという話<sup>49)</sup>や、父親に殺された娘が小夜啼鳥となって若者の前に現れ、大きな声で啼き、人間のように話し、自分が葬られている棺の場所へ若者を導くというものがある<sup>50)</sup>。また、その啼き声が人間の言葉に似ていることから、次のような聞き做し（鳥の啼き声を似た言葉に置き換えること）も存在している。

《мужик, мужик (скоро), Сидор, Сидор (протяжно) сала, сала, (протяжно) пек, пек, (перемена голоса, грубее), крутил, крутил, палил, палил, тьклет, тьклет, ешь, ешь, (перемена голоса) горячо, горячо... и т.д.》<sup>51)</sup>

少なくともあるが、上に引用したいいくつかの資料から、小夜啼鳥はその特徴的な啼き声ゆえに、予言をし、人間のように話し、不思議な能力を持つと考えられていたことが分かるのである。

そして、『不幸物語』においては、小夜啼鳥が擬人化された“不幸”となって飛んでくる。

Я от горя во темны леса, —           わたしは“不幸”から逃げる、暗き森へ、  
И тут горе — соловьём летит!<sup>52)</sup>       だがそこには“不幸”が、小夜啼鳥となって飛んでくる。

この『不幸物語』の記述から、やはり小夜啼鳥と「異界」との関連が想起されるのである。さらに、小夜啼鳥と「死」あるいは「異界」との結びつきを示すような次のような諺風成句も存在している。

Спать соловьиным (будким) сном.<sup>53)</sup>

小夜啼鳥さながらに(まどろみ浅く)眠る。

俗信では深く眠り込むことは「死」を意味していたが(例えば、「Сон смерти брат. Уснул помер. Спит человек не живой.<sup>54)</sup> 夢は死の兄弟。眠り込めば、死んだこと。人は眠れば、生きてはいない。」という諺風成句もある) 上述の諺風成句は、小夜啼鳥と夢との関連、そして夢から眠りと「死」との関連、さらには、そこから小夜啼鳥と「死」あるいは「異界」との結びつきを想起させるものであり、小夜啼鳥と「異界」を結びつける観念が存在していたことを示しているといえるのである。

以上のように、小夜啼鳥はその特徴的な啼き声から、人間のように話し、特別な能力を持つとする観念、人の魂や不浄なものが小夜啼鳥に姿を変えろという観念が存在していたことが分かる。小夜啼鳥の啼き声が豊作や不作の前兆となるのも、実際に小夜啼鳥が季節を告げる鳥というだけでなく、小夜啼鳥が予言能力を持つとする観念と密接に結びついた俗信だと考えられるのである。

また、死者や何らかの不浄な存在が、この世の人間と交わる際に、鳥に姿を変えその啼き声で何かを伝えようとする時、人間の言葉に一番似た啼き声を有している小夜啼鳥が「異界」との関連から現れるのではないかと考えられる。また昔話や泣き歌においては、話の展開に関わる重要な場面で、ある種の効果をもたらすことを狙い、小夜啼鳥を登場させたとも考えられるのである。フェドソーヴァの泣き歌では、小夜啼鳥は、夢に現れ嘘をつくという非常に特殊な用いられ方をしているが、それは「異界」とのつながりを示唆しつつも、やもめの悲哀さを殊さら強調するために現れた存在ではないかとの考えもできるのである。

・おわりに

フェドソーヴァの葬礼泣き歌には、様々な鳥が現れるが、これらの鳥を用いた表現は、鳥の飛翔能力を最大限に利用することにより、不浄なものが鳥に姿を変え、または鳥がその使いとして、この世に不幸や災いをもたらすという表現であるとともに、死者の魂が鳥に姿を変えこの世からあの世へ旅

立ち、そして逆にあの世からこの世へ回帰せよという遣された者の切々たる帰還願望を託した表現でもあるといえる。そして、このことより鳥が此岸と彼岸を行き来する重要な役割を担い、飛翔能力を有するが故に、あの世とこの世を繋ぐ使者としての機能を果たしていることが分かるのである。

本稿では、フェドソーヴァの葬礼泣き歌に現れる「鳩」と「小夜啼鳥」を考察することにより、キリスト教に影響を受けたであろうと思われる観念と異教的な観念が一見相反するかのような形でそれらの比喻表現に反映されながら、鳥が遣された者と死者をつなぐ役割を果たす反面、災いをもたらすという両義性を有する表象を持つことを確認した。フェドソーヴァの泣き歌に現れる鳥は、実際に存在する鳥の形象とその性質に合わせながら、比喻する際に様々に使い分けられていると考えられるのである。今後、フェドソーヴァと他の泣き女の泣き歌に現れる「鳥」の比較考察という点から、鳥を用いた比喻表現をより深く掘り下げ、より多角的に検討し、研究課題としたい。

#### 註

- 1 拙稿「フェドソーヴァの泣き歌に見る「死」の比喻表現」『創価大学大学院紀要』第23号、2001年、82頁。
- 2 拙稿「フェドソーヴァの泣き歌に見る「死」の比喻表現」『創価大学大学院紀要』第23号、2001年、82-83頁。
- 3 Введение Е.В. Барсова к первому тому 《Причитаний Северного края》 // Причитания Северного края, собранные Е.В. Барсовым. Т.1. СПб., 1997. стр.6.
- 4 И.А. Федосоваの泣き歌研究の第一人者とされるキリル・ヴァシリエヴィチ・チストーフ Кирилл Васильевич Чистовによると、当時を知る村人たちが、フェドソヴァを一般的な力点を置いたフェドソーヴァではなく、フェドソーヴァと呼んでいたという。筆者は間接的ではあるが、このことを伺った。このことより、本稿においては、フェドソヴァをフェドソーヴァとすることで統一する。
- 5 例えば、一連のフェドソーヴァ研究やロシアとフィン・ウゴル系民族の泣き歌の関係を論じたチストーフ、泣き歌に現れる「あの世への道」の観念を論じたチスチャコフ、泣き歌に描かれた「家」の意味論を論じたネーフスカヤの研究など多用な角度から数多くの研究が行われている。Чистов К.В. Причитания у славянских и финно-угорских народов(некоторые итоги и проблемы) // Обряды и обрядовый фольклор. М., 1982; Чистяков В.А. Представление о дороге в загробный мир русских похоронных причитаниях XIX-XX вв. // Обряды и обрядовый фольклор. М., 1982; Невская Л.Г. Семантика дома и смежных представлений в погребальном фольклоре // Балто-славянские исследования 1981. М., 1982
- 6 泣き歌の翻訳は抄訳が多く、しかも既に絶版となっているものが多々あり、現在目にできるものは少ない。例えば、昇曙夢著『ロシア・ソヴェト文学史』河出書房、1955年、井桁貞敏編著『ロシア民衆文学』上、三省堂、1974年、N.クラフツォフ編、中田甫訳『口承文芸 ロシア』ジャパン・パブリッシャーズ、1979年、フョードル・セリパーノフ編著、金本源之助監訳『ロシアのフォークロア』早稲田大学出版部、1983年などがある。泣き歌に関する研究としては、坂内徳明「ある泣き女の生涯」『窓』39、ナウカ、1981年、同『ロシア文化の基層』日本エディタースクール出版部、1991年、栗原成郎『ロシア異界幻想』岩波書店、2002年がある。
- 7 Чистов К. В. Ирина Андреевна Федосова. Историко-культурный очерк. Петрозаводск, 1988. стр.23. フェドソーヴァの伝記に関しては、チストーフが綿密な調査を行い、まとめた上記モノグラフがあるが、本章ではこのモノグラフに依拠しているところが大きい。また、坂内徳明著「ある泣き女の生涯」(『窓』39、ナウカ、1981年)を参照した。
- 8 Барсов Е. В. Сведения о вопленицах от которых записаны причитания // Причитания Северного края, собранные Е.В. Барсовым. Т.1. СПб., 1997. стр. 254.
- 9 Чистов К. В. Ирина Андреевна Федосова. Историко-культурный очерк. стр.31.
- 10 Там же. стр. 41-43.
- 11 Барсов Е. В. Сведения о вопленицах от которых записаны причитания. стр.253-254; Барсов Е. В. О записях и изданиях 《Причитаний Северного края》, о личном творчестве Ирины Федосовой и хоре ее подголосниц //

- 
- Причитанья Северного края, собранные Е.В. Барсовым. Т.1. СПб., 1997. стр.264.
- <sup>12</sup> *Чистов К. В.* Ирина Андреевна Федосова. Историко-культурный очерк. стр.44.
- <sup>13</sup> Там же. стр.53.
- <sup>14</sup> Там же. стр.56.
- <sup>15</sup> Там же. стр.297.
- <sup>16</sup> Там же. стр.58.
- <sup>17</sup> Там же. стр.106-107.
- <sup>18</sup> Там же. стр.56-57.
- <sup>19</sup> Там же. стр.56-58, 121, 315.
- <sup>20</sup> Там же. стр.304-305.
- <sup>21</sup> Там же. стр.303.
- <sup>22</sup> *Лобанов М. А., Чистов К. В.* Запись от И. А. Федосовой на фонограф в 1896 г. // Русский Север. Проблемы этнографии и фольклора. Л., 1981. стр.209; *Чистов К. В.* Ирина Андреевна Федосова. Историко-культурный очерк. стр.301-302.
- <sup>23</sup> *Чистов К. В.* Ирина Андреевна Федосова. Историко-культурный очерк. стр.104-108.
- <sup>24</sup> *Чистов К. В.* Русская причеть. Вступительная статья // Причитания. "Библиотека поэта. Большая серия." Второе издание. Л., 1960. стр.12-13.
- <sup>25</sup> 泣き歌の引用に関しては、チストーフによる『パールソフ収集の北部地方の泣き歌集』《Причитанья Северного края, собранные Е.В. Барсовым. Издание подготовили Б.Е.Чистова, К.В.Чистов. Т.1. СПб., 1997.》を用い、ПСК. Т.1. 168-112.のように、文献の略記号、巻数、頁数、行数の順に示した。行数がまたがる場合は、記号「～」を用い、例えば10頁の1行目から15行目の場合は、10-1～15のようにする。
- Причитанья Северного края, собранные Е.В. Барсовым. Издание подготовили Б.Е. Чистова, К.В. Чистов. Т.1-2. СПб., 1997.
- <sup>26</sup> Библия. Новый завет. М., 1976. Мф 3,16; Мар 1,10; Лк 3,22; Иоан 1,32.
- <sup>27</sup> *Ермолов А.* Народная сельскохозяйственная мудрость в пословицах, поговорках и приметах. Т.3. Животный мир в воззрениях народа. СПб., 1905. стр.324.
- <sup>28</sup> *Афанасьев А.Н.* Поэтические воззрения славян на природу. Т.1. Репринт. М., 1994. стр.541.
- 以後この書名に関しては、*Аф.*、ПВСП. という略記号を使用する。
- <sup>29</sup> *Аф.*、ПВСП. Т.3. М., 1994. стр.294.
- <sup>30</sup> *Токарев С.Т.* Религиозные верования восточнославянских народов XIX начала XX века. М., Л., 1957. стр.56.
- <sup>31</sup> Введение Е.В. Барсова к первому тому 《Причитаний Северного края》. стр.13.
- <sup>32</sup> *Пришвин М.М.* В краю непуганых птиц // Собрание сочинений в восьми томах. Т.1. М., 1982. стр.74. 邦訳は、太田正一訳『森と水と日の照る夜 セーヴェル民俗紀行』成文社、1996年。
- <sup>33</sup> Славянские древности. Этнолингвистический словарь в пяти томах. Т.1. А-Г. М., 1995. стр.516.
- <sup>34</sup> *Зыблин М.* Русский народ, его обычаи, обряды, предания, суеверия и поэзия. Репринтное воспроизведение издания 1880 года. М., 1990. стр.263.
- <sup>35</sup> *Запорожец В.В.* Сны и видения как часть ясновидения(По материалам, собранным в Москве летом 1998 г.) // Сны и видения в народной культуре. М., 2002. стр.103.
- <sup>36</sup> *Даль В.И.* Пословицы русского народа. Сборник В. Даля. Т.2. М., 1984. стр.342.
- 以後この書名に関しては、*Даль*、ПРН. という略記号を使用する。
- <sup>37</sup> Повесть о горе-злочиствии. Издание подготовили Д.С. Лихачев, Е.И. Ванеева. Л., 1984. стр.71.
- <sup>38</sup> ここでは、日本の喪屋に相当する、墓の上あるいは側に建てられる小窓付きの小さな家のような建物のことを指していると考えられる。ロシアの埋葬儀礼においては、墓地に小窓の付いた小さな小屋を建てることがあるが、これは死者があので生活を送るための住居であり、小窓から残された家族の生活を見守るとの観念からなされるものである。また出棺の際、窓から死者を運び出し、一方、死者は玄関ではなく、窓から家族のもとへ戻ってくるとする俗信から、窓と「異界」との関連が想起される。例えば次の文献を参照。*Генерозов Я. К.* Русские народные представления о загробной жизни на основании заплачек, причитаний, духовных стихов // Мифология славян. СПб., 1999. стр.237; *Барсов Е. В.* Погребальные обычаи на Севере России // Причитанья Северного края, собранные Е.В. Барсовым. Т.1. СПб., 1997. стр.248-250.



- 
- <sup>39</sup> *Даль*,ПРН. Т.2. стр.359.
- <sup>40</sup> *Даль В.* Толковый словарь живого великорусского языка. Репринтное воспроизведение издания 1903-1909 гг., осуществленного под редакцией профессора И.А. Бодуэна де Куртене. Т.4. М.,1994. стр.379. 以後この書名に関しては、*Даль*,ТСЖВЯ.という略記号を使用する。
- <sup>41</sup> この諺風成句では、小夜啼鳥が啼き始めることによって「晩春」あるいは「初夏」の訪れを指している。
- <sup>42</sup> *Ермолов А.* Народная сельскохозяйственная мудрость в пословицах, поговорках и приметах. Т.3. Животный мир в воззрениях народа. стр.337.
- <sup>43</sup> Там же. стр.338.
- <sup>44</sup> *Снегирев И.М.* Русские народные пословицы и притчи. Репринт. М., 1995. стр.219.
- <sup>45</sup> *Коринфский А.А.* Народная Русь. Издание репринтное. М., 1995. стр.563-564.
- <sup>46</sup> Слово о полку Игореве. “ Библиотека поэта. Большая серия. ” изд.3-е. Л., 1985. стр.23.
- <sup>47</sup> *Срезневский И.И.* Словарь древнерусского языка. Репринтное издание. Т.3. Часть 1. М., 1989. стр.406.
- <sup>48</sup> *Аф.*,ПВСП. Т.1. стр.301.
- <sup>49</sup> *Афанасьев А.Н.* Народные русские сказки А.Н. Афанасьева. Т.2. М., 1985. стр.223-224.  
以後この書名に関しては、*Аф.*,НРС.という略記号を使用する。  
米川正夫訳 『ロシア民話集（アフナーシエフ民話集）4』現代思想社、1977年、47-50頁。
- <sup>50</sup> *Аф.*,НРС. Т.3. М., 1986. стр.36-37.
- <sup>51</sup> *Ермолов А.* Народная сельскохозяйственная мудрость в пословицах, поговорках и приметах. Т.3. Животный мир в воззрениях народа. стр.295.
- <sup>52</sup> Повесть о горе-злочастии. стр.72.
- <sup>53</sup> *Даль*,ТСЖВЯ. Т.4. стр.435.
- <sup>54</sup> *Снегирев И.М.* Русские народные пословицы и притчи.стр.380;*Даль*,ПРН. Т.2. стр.24.